



日本洋書協会

JAPAN ASSOCIATION OF INTERNATIONAL PUBLICATIONS

NOVEMBER 2018
REPORT MAGAZINE

会報誌 | vol. 52 no. 6

Published by JAIP 1-1-13-4F, Kanda-Jimbocho, Chiyoda-ku, Tokyo 101-0051

e-mail:office@jaip.jp

Frankfurt Book Fair 2018に参加して

フランクフルトの朝は肌寒い。あたりが明るくなってくるのはようやく7時半頃。今年は、日中の気温がかなり高くまで上がる日が続いたものの、やはり朝8時過ぎにホテルを出るときはひんやりとした空気を感じる。今年もやって来たのだな、と身が引き締まる。同時に、一年ぶりに会う担当者の顔を思い浮かべ、新たに始まるかもしれないビジネスへの期待を胸に、どこか高揚した気持ちを覚えるのもこの瞬間である。ホテルから中央駅までの道を歩きながら、一日のアポイントの相手と話すべき内容を頭の中でなぞり、会場のMesse Frankfurt（メッセ）へ向かう電車へ乗りこむ。

8号館まであるメッセのうち、南江堂のブースがあるのは4号館の3階（Hall 4.2）。Hall 4.2にはSTM（Science、Technology、Medicine）関連の出版社が集まる。ElsevierやSpringer Natureといった巨大出版社や、トップジャーナルを発行する世界の医学会など、約500社のブースが並ぶ。長年の経験者と話すと、昔と比べてフェアの参加者や出展ブースの数が減ったということを良く聞くが、私が参加してきたここ数年では、数の面では大きな変化はないように思える。だが、ホールを端から端まで歩いてみると、電子出版プラットフォームやアクセス解析ツールなどを提供するIT関連企業が、これまでより多く見受けられることに気付く。出版業界の変容を受け、この舞台に来るプレイヤーの内訳が少しずつであるが着実に様変わりしているのであろう。

日中はアポイントのリストを片手に、朝から休みなく続く会議をこなし、ブースを行き来する。乾燥した空気のせい、か、久しぶりに話す英語の発声のせ



いか、喉が痛くなってくる。今年のはど飴をもっていった正解だった。夕方が近づいてくると、あちこちのブースから「ボン」とシャンパンを抜栓する音が聞こえてくる。自社ブースに取引先を招いてパーティが始まるのだ。皆、ワインやビールを片手に熱心に立ち話をしている。出版業の来し方や行く末を議論しているのだろうか。それとも、フェアが終わった後の休暇の過ごし方の情報交換をしているのだろうか。そんなことを考えながら各ブースのパーティの様子を眺めるのは、ブックフェアにおいて私が好きな場面の一つである。もちろん、自分もグラスを持ちながら。

フェアは水曜日から金曜日までの3日間が商談日（Business Day）となっている。とはいっても多くの担当者、特に欧州からの参加者は水曜と木曜の2日間で仕事を終え、3日目の金曜日はぐっと人が少なくなる。また土曜と日曜は一般開放日となり、ドイツ中から人が集まって会場は様変わりする。一般

書籍が展示されるホールは熱気に満ち、会場の外にはいたるところに漫画やアニメのキャラクターのコスプレをした人であふれる。フェアと同時開催でコスプレの選手権が行われているようで、毎年の風物詩ともなっている。一方、お堅い学術出版社ばかりの Hall 4.2 は土日には閑散とする。今年は土曜日までアポイントが入っていたため、そんな対比も遠目に見ることができた。開催期間を通して、主催者の発表によると 2018 年のフェア来場者は約 28 万 5 千人。昨年とほぼ同じでまずまずの盛況だったようである。

メールだけでなく電話会議システムなどの IT ツールが発達した現在、海外の出版社が相手であってもコミュニケーションをとるための手段はいくら

でもある。そのような時代においても、こうやって顔と顔を合わせられる機会があることの意義は大きいと思う。一度顔を合わせるだけで、それ以降のコミュニケーションの内容やスピードが大きく変わることを何度も経験したからだ。今から 5 年後、10 年後には、フェアで会議をする相手や話す内容は、もしかしたら現在とは少し異なっているかもしれない。IT 技術を活用してフェアのあり方自体も変わっているかもしれない。それでも、開催が近づいてくる 8 月か 9 月頃にはきっと、海外担当者と「See you in Frankfurt!」という言葉を交わしているだろう。また、そういう場であり続けてほしいと思う。

(南江堂洋書部 原 隆次)

外国人に
おすすめの

Books on Japan

第4回

チャールズ・イー・タトル出版
花井 陽子

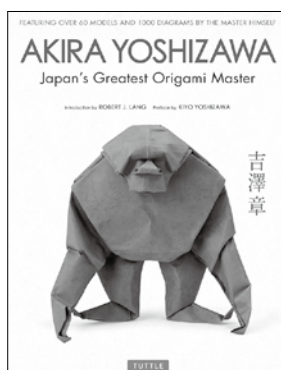
おりがみ (後篇)

前篇では日本の文化として広く知れ渡っているおりがみの簡単な歴史等についてご紹介させていただきました。今回は具体的に、折り紙が世界ではどのように展開されているのか、折紙作家 3 名に焦点を当て、弊社の刊行物と共にご紹介させていただきます。

折紙の世界に少しでも興味を持ていただければ幸いです。

『Akira Yoshizawa』

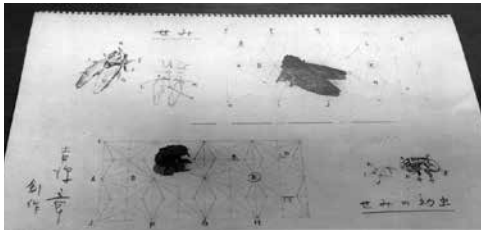
吉澤 章 (1911-2005) は日本の創作折紙の第一人者であり、現代おりがみの父とも呼ばれています。折紙を世界へ広げる事に多大な貢献をした人物でもあり、折紙を単なる遊戯ではなく、芸術へと昇華させることに成功した人



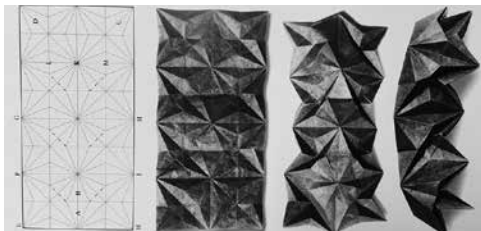
物とも評価されています。私たちが幼少時より慣れ親しんでいる「山折り」「谷折り」といった折り方の用語や折り目を示す点線やひっくり返す矢印などのシンプルで明白なダイアグラムを開発したのも吉澤の功績です。

吉澤の折紙への興味は 4 歳から持っていたようで、27 歳の時にエンジニアとして会社に勤めながら、本格的に折紙を学び始めました。幼少時より自然を愛し、観察を続けてきた吉澤による生き物の折紙は多くの人に感銘を与えました。彼自身が最高傑作と自負する「蟬」は、そのデザインを完成するのに 20 年もの年月を費やしたようです。その 20 年という年月が早いか遅いのかの判断は素人には出来ませんが、何気なく折っている折紙に実は相当な年月による時の積み重なりが存在していることを思い知らされます。そして吉澤によるその蟬のスケッチと図案を見してみると折紙の世界のセオリーの何たるかを垣間見るようです。すなわち折紙とは「折る」行為のみならず、「折り目」のデザインでもあるのだと気づかされます。二次元から三次元を立ち上げる

不思議、折り目から作り上げるイメージ、折紙とは文系脳には理解不能なかなり数学的で科学的な紙の芸術なのだと実感します。本書は英文で読める唯一の吉澤章の集大成本です。解説は豊富であり、吉澤の折紙、そして日本の創作折紙に触れることができる一冊です。



吉澤の蟬スケッチ

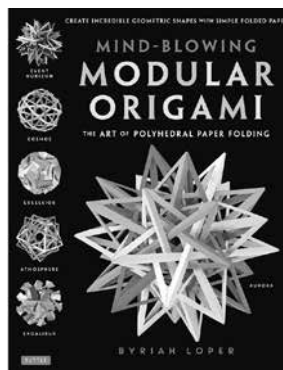


蟬図案

『Mind-Blowing Modular Origami』Byriah Loper

折り紙は数学にも応用されています。数学脳を持ち合わせていない私には一体どのように応用されているのかは未知すぎる世界なのですが、前職で洋書売り場の理工書を担当していた時、確かに Origami and Mathematics といった

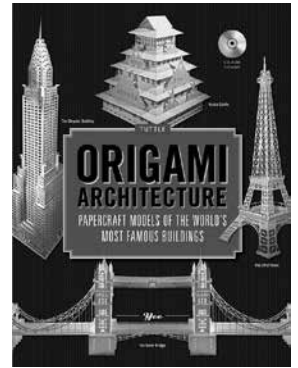
キーワードの Springer のテキストがありましたし、お問合せも受けた記憶があります。次にご紹介するのは、本書を出版した時はまだ若干 22 歳であった天才頭脳の持ち主の Byriah Loper (ビア・ロベル、1994-) です。同じモチーフの折り紙をただひたすらに繋ぎ合わせて、計算機を駆使しながら様々な作り上げた多面体の数々は、その構造をとらえようとするとエッシャーの騙し絵を見ているような、脳がトラップ状態になるようなしろものです。知恵の輪のようでもあり、ビア・ロベルの脳内構造をそのまま折紙で編み上げたような、美しくてカラフル



な多面体です。彼の折紙への興味は紙ヒコーキから始まったそうです。タイトル通り mind-blowing な折紙は、好奇心旺盛なそして数学好きの少年少女にそっと手渡したい、実にスケールの広いおりがみの世界です。

最後に、香港の折り紙作家 Yee (イー) について簡単にご紹介します。貧しい家庭で育ったという彼は幼少時に玩具のない生活を送っていたようです。当時そんな子供に魔法をかけたのが新聞紙やチラシといった紙でした。彼は紙を使っ

て様々な折紙を楽しんだようです。彼の代表的な作品は切り絵ですが、紙によってエッフェル塔、ホワイトハウス、ウエストミンスター宮殿など、世界各地の様々な建築物を創作しています。(『Origami Architecture』)



中国系アメリカ人作家ケン・リュウによる『紙の動物園』でも貧しい家庭で育った主人公の母親が新聞紙で作った折紙の動物が重要なモチーフとなっており、大人になった主人公の記憶と感情を揺さぶる場面があります。一枚の紙が様々な形へ姿を変えするという幼少時の折紙体験は、魔法であり、イマジネーションの源になるのかもしれませんが。テレビ、ゲームにインターネットと様々な物と刺激に溢れている現代生活ですが、一枚の紙と徹底的に向き合ってみると、人を可能性に満ちた別世界へと導いてくれる、それが折紙の世界なのかもしれません。なんてエコでお金のかからない、素晴らしい遊びであることよ…！

当初の予定ではもっと様々な折紙作家を取り上げたかったのですが、相変わらず紙面が足りず、これで終わりとさせていただきます。もし折紙に更なる興味を持たれた方がいましたら、是非弊社までお問合せください。また、今回ご紹介させていただきましたのはコアな、売れ筋には入らないけれど、良書であるタイトルを取り上げました。売れ筋の折紙も知りたいという方は弊社のカatalogをご参照いただければと思います。

我が社・わが街

第17回 浜松町

丸善雄松堂株式会社

舟茂万里子

私が浜松町勤務となったのは2018年5月の連休明けのことでした。浜松町生活は約半年と、おそらく短い方から数えた方が早い新参者ゆえ、ごく狭い範囲内でのご紹介になりますが、お付き合いいただけましたら幸いです。

丸善雄松堂の浜松町本社は、JR浜松町駅・都営地下鉄大門駅から徒歩5～6分、ゆりかもめの竹芝駅からは徒歩3分の国際浜松町ビルの8～9階にあります。ビルの正面玄関（南側）を出ると目の前に地上39階予定の高層ビルが建設中、ビルの裏手（北側）にはゆりかもめが走っており、その向こう側の浜離宮恩賜庭園との間にも地上26階のビルや四季劇場が建設予定です（現時点で自由劇場だけが上演が続けていますが、ある営業員の話では、知り合いの英文学の先生が観劇に訪れたところに路上でばったり出会ったそうです）。駅から会社までの間も、地上5階位の高さに浜松町駅から竹芝駅、竹芝栈橋までつながる歩行者通路（ペデストリアンデッキ）が造られつつあります。気づくと、向かいの高層ビルには骨組みから外壁ができ、窓ガラスがはめられ、歩行者通路用の柱が一本増え、地上で作業中だった通路が高速道路上に載り（写真①）、通路がもうひと区間延び…。工事の進行に伴って人の流れが変わることもあり、なかなか落ち着かないですが、昨日と今日で何かが変わった、と気づくと、なぜか得意げに人に話したくなったりします。ちなみに、ビルの9階の一角からは汐留の夜景が見え、あと数年でこの近辺もあのような夜景の一部になっているはずなのだなあ、と思ったりもします。

工事の進行過程を見守る楽しみの一方で、あまりにも工事現場ばかりで自然が、緑が少ないという印象もありましたが、夏もしっかりセミの声が鳴り渡っていてやや安心しました。浜離宮と芝離宮、二つの庭園が間近にあるお陰でしょうか。写真②は旧芝離宮恩賜庭園にて、会社正面で建設中の高層ビルを借景にしたものです。どちらを向いても、周囲の高層ビルや線路や工事現場のクレーンが映り込まない方角はないわけですが、それでもこの中だけは江戸時代に造られたままの世界を保つように日々整備

されているということが、かえって奇跡のように思えます。ちなみに庭園内はお弁当持ち込み可能（アルコールは不可）ということで、本格的に寒くなる前に一度、和の庭園ランチを実行したいところですよ。

もう一つ自然を感じられるものといえば、やはり海です。浜松町駅は山手線の駅の中で最も海に近いだけあって、降りたとたん潮風を感じます（朝のラッシュ時は無理かもしれませんが）。高速道路をくぐったあたりから竹芝栈橋の広場に立つ万国旗のはためくマストが見えてきて、出勤風景にしてはなんとも非日常的です。オフィスの窓は閉め切りですが、時折、出航する船の汽笛が室内まで聞こえることもあります。ちなみに、竹芝客船ターミナル内には東京都の離島の食材を使ったカフェと物産コーナーがあり、広場では世界各国の料理が楽しめるネオ屋台村が出現することもあります。栈橋上はベンチが充実しており、海を眺め潮風に吹かれながら一息つけます。やはり本格的に寒くなる前に、潮風ランチも実行したいものです。（もちろん、屋根のあるランチスポットがないわけではありませんが…）

浜松町といっても海岸、竹芝のご紹介に終始してしまいました。浜松町駅の西側から大門、芝公園にかけては、世界貿易センタービルや増上寺や東京タワーなど旧知の名所が密集していますし、夜もかなり賑やかそうです。そのあたりの詳細は、別の機会に浜松町勤務のベテランによるご案内に譲りたいと思います。



写真①



写真②

わたしの職場

リレー連載 ● 第5回

チャールズ・イー・タトル出版株式会社
営業部第一営業課 課長
鴨志田新悟

— チャールズ・イー・タトル出版の仕事紹介 —

タトル出版の鴨志田、入社6年目です。自社書籍の日本文化に関する英文書籍の販路拡大が主な仕事です。洋書の取扱い書店様はもちろん、今まで、洋書を扱っていなかった書店様、書店以外での販売先も着実に増えてまいりました。書店での実務経験があるため、日々のルート営業だけでなく、魅力的なフェア施策の企画、提案も得意としております。

素晴らしい執筆の機会をいただきましたので、会社の名誉を高めるような前向きな記事をぜひとも書かなければ、何を書こうか、どうしたら私たちの興味を持ってもらえるだろう、一緒に仕事がしたいと思ってもらいたい、などと考えながら今までの仕事を思い返しました。弊社のことが伝わるようなユニークなエピソードを綴り、その件に関する私の今後の展望を披露することで、職場紹介とさせて頂けたら幸いです。

弊社のCEO エリック・ウィは、アクティブに仕事をすることを私達に推奨しております。コンサバティブな姿勢を嫌い、いつも私達をユーモアのある言葉で鼓舞します。まだ弊社の書籍が今ほどシェアを伸ばしきれていなかった頃には、「もっと戦いなさい。“NINJA TUTTLE”というTシャツを作って、それを着て書籍の営業をしなさい、そして、取引先や書店員さんにも配って一緒に着て戦いなさい」という助言を頂きました。

突然変異をした4匹の亀が下水道の中で、ネズミのスプリンター先生に忍術を習うアメコミ『Mutant Ninja Turtles』の“Turtle”と“TUTTLE”の語感をあわせて、そのようなジョークを言ったのだと思います、一流のアメリカンジョークだと思いました。この言葉は、積極的により多くの方と関わりを持つことの大切さを伝えたかったのだと思っております。

私は冗談の通じない生真面目で保守的な日本人です。ので、“NINJA TUTTLE” Tシャツの製作をすぐにでも始めなければと思いました。しかし、日々の業務に忙殺され、未だ実現できておりません。二年

後には、東京オリンピックという弊社書籍へのニーズが大きく高まるイベントが待っております、今こそ作るべきではないかと思い立ちました。

本ページにも掲載の通り、既にデザインは作成済みです。Tシャツのボディは、厚手のチャンピオン社のものにしたいと考えております。普段使いもし易いようにロゴのみのシンプルなものにいたしました。どうか、本誌の読者の方で、このTシャツを着て、弊社書籍の新規取り扱いや販路拡大と一緒にしてくれる方がいらっしゃいましたら、意気込みやTシャツの希望サイズ（若者の間では、少し大きめを着るのがトレンドのようです。2019年はネイビーを予定しております）などをタトル出版の鴨志田までご連絡ください。

具体的なお話は直接会ってからいたしましょう。そして、“NINJA TUTTLE”のTシャツを着てマンガの亀のように突然変異を果たし、共に戦い、大きな成功を勝ち取りたいです。来年の末には色のついた鉢巻をして、互いの活動を称え合うような秘密のパーティーを開きたいと思っています。いい場所があります、忍者の隠れ里風の内装と演出で訪日外国人に人気のレストラン『NINJA AKASAKA』はいかかでしょうか。

本記事の掲載をきっかけに、来年こそ実現できればと思っています。私は多くの賛同が集まれば、何事も必ず実現できると確信しております。どうか、この考えが正しいことを皆様と一緒に証明する機会をいただけたら幸いです。このように、一見関係のないところにも、大きな仕事につながるヒントが有るのではないかと広い視点を持ち、私たちは日々、書籍の販路拡大の可能性を模索し続けております。



Pharmaceutical Press が発行する医薬品情報データベース

MedicinesComplete



主な収載タイトル

- Martindale : The Complete Drug Reference
- British National Formulary (BNF)
- Stockley's Drug Interactions
- Pharmaceutical Excipients
- Drugs in Pregnancy & Lactation (Briggs)

無料トライアル

受付中!!



-  65 万ページ分に及ぶ最新の医薬品情報を掲載するオンラインリソース
-  シンプルで明瞭なインターフェイスと直感的なナビゲーション
-  PC, タブレット, スマートフォンからアクセスが可能

株式会社 南江堂 洋書部

東京都文京区本郷 3-42-6 Tel: 03-3811-9950 Fax: 03-3811-5031

E-mail: adv-yosho@nankodo.co.jp

日本洋書協会会報 vol.52 No.6(通算555号) 発行日2018年11月1日 編集者 遠藤 尚子

発行所 日本洋書協会 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1-13 (株)MHM内 TEL 03-3518-9631 FAX 03-3518-9523

URL:<http://www.jaip.jp> E-mail:office@jaip.jp